

私の見聞したアメリカ、カナダにおける成人教育、生涯教育について

足利市立北郷中学校 福 田 みさを

☆ 何が一番楽しかったか

きょうは1978年8月5日。ユネスコの夏季学校で国際理解をテーマに小学6年生と1時間すごしてきた。その時間に私の旅の話もした。そして時間のおわりに —— 「私が2カ月間日本をはなれて、いろいろな経験をしてきたわけだけど、何が一番楽しかったか、あててみてくれない？」とたずねてみた。たくさんの子が手をあげた。「たくさんの人を知ったこと」「たくさんの人と話したこと」

まったくその通り。生徒は、始めて会ってわずかな時間にもう私の言いたいことをキャッチしてくれたのだ。 「そうなの、だから中学へいったら一生懸命英語勉強してね、がんばろうと思う人？」 —— 一斉に手があがった。風通りの悪い教室はむし風呂のようで、途中でゲームなどをいれてみたので、実のある授業にはならなかったけど。 「握手は力強く」とゲーム優勝グループのメンバーの1人1人と握手した。その感触がファイトとなってその子等の心に残ってくれる子もあるかなーなど思い帰路についた。そしてうすれてゆく記憶の中で、はやく私の見聞記をまとめておこうという気になった。そしてそれをみなさんに読んでもらうことが私の義務だと感じ、暑さの中で涼しかったカナダを思い乍ら思いつくまゝに書こうと思った。

☆ C I E E に参加して

私は1976年7月23日より2ヶ月間C I E Eの企画の英語教師のための海外研修に参加した。主たる目的は英語そのものを勉強することであるが、行く前に何かテーマを決めるよう市教委の方から話があり、成人教育、生涯教育について見たり聞いたりしてこようということにしたのである。

☆ このテーマを選んだ理由

PTAの広報部に属して新聞作りをしてみた。みんなに喜んで読んでもらえるようなもの、そしていくらかでも向上できるような、そんな記事をのせたいと思った。趣味特集号として趣味について語ってもらった。多くの人が学習しようという気持を持っていることもわかった。しかし学校をはなれた一般成人にとって、なかなかその巾は限られて趣味の範囲からすゝまない現状であることを痛感していた。外国の成人達は、家庭婦人はどうだろうか。そんな疑問をもっていた。

☆ 世界各国から

バンクーバー（カナダ）コロンビア大学に着いておどろいたことは、世界各国から勉強に来ている人の多いことだ。何百人が一度に食事ができるような広い食堂でいれかわりたちかわり食事をするの

である。食事時はよい勉強のチャンスだから日本人ばかりでかたまらずに話しかけるように言われていたので、つとめてそのように心がけてみた。30代40代から60才以上の人まで、色の黒いアフリカの人、ターバンを巻いたアラビアの人、中国人、フランス人、ニュージーランドから来た人、もちろんアメリカやカナダ人が多いが、多くの成人が勉強しているのに本当にびっくりさせられた。

☆ おんなの人　　子どもは心配ではありませんか？

勉強しに来ている人の半数くらいが女性であることも又又おどろきである。私の「子どもがいますか、子どもが心配ではありませんか。」の問に対して誰一人として「心配だ」と答えた人がいないのです。Old enough (十分に大きい) と答えるのです。何かと聞くと4才だの7才などというのです。日本人にはとても考えられないことです。その間に御主人がめんどろをみたり、子守さんがめんどろみたりするようです。又家中で来ている人もいました。その子どもたちはやはり保育所のようなところが大学内にあるのです。私などそれに比べると子どもも十二分に大きいのにこの企画に参加することはとても勇気がいることでした。私の外国行きを知った友人たちは「楽しいですね、すてきですね」などと言う人はいない。「えらいわね、よく決めたわね」と言われた。本人もその通り勇気をもって悲壮なる覚悟で参加したのである。それに比べて気質のちがいののか、勉強しているママの多いのには本当におどろかされた。

☆ 黒人と話して

ちょっと話すのに抵抗があったが、思いきって食事の席をすぐ隣にしてみた。彼等はいつも集まるくせがある。いつも10人位まとまって食事をしていた。彼等の英語はとてもきれいに感じた。国からの補助をもらい、動物の飼育や漁業について学んでいる人、又、医者になる人、教師になる人などでかなりのエリートなのか、なかなかの紳士である。英語については小学校から英語の授業があり、ある人は週に12時間もあると言った。大学での講義はすべて英語なのでここ(コロンビア大学)での授業には言葉の障害はないとのことであった。サエモンという名の黒人青年に「あなたの国の言葉でハローというのは何といいますか。」と聞いたら、「ウジャンボ」と教えてくれた。ジャンボジェットがうなればいいんだな——とおぼえた。なかなか名前もおぼえられないが、ドザエモンのドがなし、としたのでおぼえられた。次にちがう黒人とあった時、早速「ウジャンボ」と挨拶したらどうも通じなそうだった。しかしその人はオハカという名だったので、日本語でオハカは死人をうめる墓のことだと説明しているうちにサエモンが来たので、「ウジャンボ」が通じない——と言ったら、同じ黒人でも言語がちがうと話してくれた。オハカの国では1つの国なのに200もの言語があるのだそうだ。世界に6000の言語があると書いてあったのが、はじめて信じられる気がした。アフリカの黒人とみれば1つの言語を話していると思っていた私がはずかしかった。彼らと数回話したろうか、何にしる色が黒いからさがすのが楽だ。しかしサエモンは？と私が何回か聞いたら「サイモンに気があるのかな」なんて声がきこえたので、それ以後黒人と話すのはストップした。黒人の中には女性がいなかったのは残念であった。

☆ 学習する教師，サラリーアップ

私の話した大半の人は女教師だった。彼らは夏休み6週間のコースで単位をとりに来るのだ。私は多くの女の人が勉強しているのおどろいたこと、成人教育、生涯教育に関心があることを述べ、なぜこのように多くの人が勉強しているのかたずねた。その多くの答は、サラリーがアップするから、との答であった。その費用は自費であるが中には学校からの援助がある人もあり、国全体がそのような成人教育に対して莫大な補助を出していることも知った。彼等が私に対して「あなたはどうか」と聞くので、自費と答えると、帰るとどの位サラリーがアップするか、と聞いてきた。そんなことはない。と答えると、なぜと聞きかえされたが、日本にはそんな制度がない。と答えたが不思議そうな顔をしていた。

☆ 校長をめざす女性

毎夏来ているという女教師、今年で4年目。校長になるためにはまだまだ単位をとらなければならないと話していた。バンクーバー島（カナダ）から来ているふとった婦人にこの大学で学ぶのにはどの位の費用がかかるか聞いたら、6週間のコースを2つとって200ドル（1コース100ドル）、その他たべものベット部屋代、約300ドル、その他日用品200ドル、計700ドル位がこの費用だという。その当時1ドル300円なので計算してみると21万ということになる。そのお金は支払うのに楽か、との間から給料の話になる。経験年数なし、初任給で2年大学コース卒は6000ドル、（180万）3年コース卒で8000ドル（240万）4年コース卒で10,000ドル（300万）その人は15年経験で1カ月のサラリーが1,000ドル（30万）ただし、10カ月給料だそうだとすると21万はなかなかの大金であると思った。その人は自分には子どももいないから楽だけど大変な人も多いだらう。との話だった。

☆ 学生結婚

アメリカ、カナダでは学生結婚が多く、途中で退学する女性がかなりいることも知った。そしてその人たちは子どもたちに手がかからなくなると、又、大学を続けるのだそう。日本の家庭婦人が大学へ再び行く——、といたら、どうだろうか、まだまだ理解されそうにない。又、そうしようとする気もおきないだろう。学ぶことの楽しさより、学ぶことの苦しさが頭にこびりついているからだろうか。家庭にはいった女は家をあけることは、よほどの事がない限りできないと、私も思っている。でも、いつの日か、もっともっとゆとりができ（経済的にも時間的にも）れば、一生を通して学ぶことの楽しさが味わえそうな気がしてきた。

☆ カルフォルニアから来た人の話

カリフォルニアでは五年間働くと一年間の有給休暇がとれるのだそう。そしてその制度を利用して更に単位をとりて大学で勉強する人がかなりいる事を聞いた。「それはすてきな制度だ」と感心した。そしてそこでも、なぜそのように勉強するのか、の説明は、取得単位によるサラリーの差であった。一度教員になってしまえば、研修会に出て居ねむりをしていてもまにあう日本の方が幸せなのか

一などと考えてもみた。生徒達に勉強しろと言う教師自身が一番勉強しない、と言われることがあるが、私なども追いつめられないと勉強なんてできるものではないので、何とか見習いたいと思った。

☆ 65才以上月謝はタダ

8月7日夜大学内であった老婦人、孫が11人もいるとのこと、学園内を歩き乍ら話した。「こちらの耳は遠いので、こっちで話して—」と指さす。片方の耳が不自由になった。品の良いおばあちゃん、60才をすぎた人たちは、シニアシティズンと呼ばれており、その人たちは月謝は無料だという話を聞いた。しかしこの人たちは、もう職をもっていそうにないので、サラリーアップのために単位をとっているのではなさそうなので、「何を専攻しているのですか」と聞くと「フランス文学」とのこと、「何のために?」と聞きかえすと、「ただ好きだから」とにっこり答えた。その笑顔のすばらしさ。そんなおばあちゃんになれたらすてきだナ—と思った。

☆ カナダのホームステイ

カナダ人のプライドはたいしたもの、是非カナダでもホームステイを—とのことで三泊の経験、二人ずつ組になって一軒の家へひきとられた。私が行ったのは夫婦共かせぎの家、玄関のドアの鍵を渡され、これで開けて入って来なさい。又、朝はしめて出かけなさい」と鍵のしめ方をおしえてくれた。私たち2人にはそれぞれ1部屋ずつ最高の部屋を提供してくれた。その間彼等はどこに寝るのかと思えば地下室らしかった。朝飯は主人のトニーの役、夕飯はおくさんのブリーリーが作ってくれた。

主人は役所、おくさんは会社の秘書、子どもたちはみんな結婚して、孫や子ども達の写真がへやに飾られてその自慢をするのがとてもたのしみらしかった。自分の娘をきれいだとか利口だとか、日本人の親は言わないようなほめ言葉を平気で言うのにおどろいた。夕食後は私たちを車にのせ、方々を見学につれて歩いてくれた。山から見下したバンクーバーの夜景は実にすばらしく今でも臉にやきついている。息子の家にも連れていってくれた。彼等はよく引越しをしたり、家の手入れをしていることを知った。おしゃべりのおくさんは車の中から休みなしに説明してくれる。こちらは相づちのうちようもないし、感謝の表現もありきたりの言葉になってしまってもどかしさを感じた。おくさんのおしゃべりが止んだと思うと、彼女はこくりこくりといねむりをしていた。1日中つとめて、夕食をつくり、又ドライブ、彼らの精一杯のもてなしに心から感謝した。そして日本だったら、共稼ぎの家で外人2人とめてくれといわれて、引受けるだろうかと考えてみた。私だったら、とても引受けかねます、と断わってしまうだろうに、と思った。彼らは大学の先生達と仲良しだ。そして協力しているのだ。これらの費用はすべて好意である。ここでも物だけでない心の豊かさを見た気がした。彼らは生きた人々からたくさんのおおきなことを学ぶ努力をしていると思った。

☆ コスタリカから来ている娘

その家の親戚の娘20才位だろうか、コスタリカ(中央アメリカ)からこのコロンビア大学へ英語をならいに来た娘がいた。コスタリカはスペイン語なのだそうだ。彼女は秘書になる資格をとるために勉強している。こちらへ来て数ヶ月というのに、もうテレビを見て笑ったりしている。話すのにも

不自由な感じがする。私はもう英語を勉強しだして30年になるのに、何となさけないのだろうかと痛感した。その娘が作ってくれたパイ（彼らはよくデザート用の菓子をたんねんに作る）私には甘すぎて、断わるのに一苦労した。彼女の勉強は目的が生活に結びついていると感じた。

☆ かけこみ寺

私は自己紹介で英語を何年も教えているがうまく話せない——いつもの様に話したすと、後から「上手ですね」と日本語がかえってきた。見かえすと背丈の大きな金髪の男性、日本語を学んで2年目だということにとてもうまいのにおどろく。私が英語で質問すると彼は日本語で答える。彼のニックネームはスケアクロウ、彼は「案山子」と漢字を書いて説明してくれた。そのブロンドの髪をうしろで一つにしばりあげて、何とも目だつかっこうである。私は彼からスサノオノミコトを連想した。

食事時に彼を見つけることは簡単だった。何しろ目だつのである。私は「きょう日本語の授業で何を勉強したのですか。」と聞くと、彼は「かけこみ寺」と勿論日本語で答えた。私はかけこみ寺について話したかったが、知識のない自分はずかしいと思った。私は日本について知らないことの多いことに気づいた。日本人と見れば、誰もお茶、お花はできると思っているし、政党のこともすぐ話題にするが、私には説明できる程の関心をもっていないことも反省した。文学でも歴史でも——私は外国へ行って日本について知らない自分を知ったのである。スケアクロウはニューヨークに仕事をもっている人だ。サラリーをためては勉強に来るとのこと、彼は中国語もフランス語もできるそうだ。

そんな彼は体が大きいだけでなくやはり中味も偉大だと感じた。

☆ インタビューのレッスン《その1》

午後の活動の一つにインタビューがあった。1回目は3人1組でかけた。住所を渡された人のところへ行って1時間色々話してくるのである。全然知らないところへ行って話してくるのはまるで南極大陸へでも行くような不安な気がした。そこはモゼック（もざいく）と呼ばれる協会で社長（？）は女の人だった。カナダへはたくさんの国の人が移住してくるので、言葉の不自由な人の為にいろいろなめんどろをみてくれるところだということがわかった。現在13カ国語を扱っているとのこと、早速「日本語を話す人はいますか。」と聞くと残念ながら「まだいない」とのこと、お金があれば、次に朝鮮語を話せる人がほしい、と言っていた。1人で4カ国語も話せる人もいるとの話、国際的な仕事なので国からの援助もあるとのこと。我々のしどろもどろの英語にとてもきもちよく相手してくれた。そして彼女は今インドで話される言葉の一つを勉強しているとのことだった。インタビューの結果を翌日のレッスンで報告するのである。正に生きた勉強方法だと思った。

☆ インタビューのレッスン《その2》

2回目は各個人で行くことになった。どんな人のところへ行きたいか先生に聞かれ、先生が相手を予約してくれるのである。市長さん、おまわりさん、お医者さん、保母さん、中には「踊り子」とインタビューしてきた人もいた。私は早速私のテーマである生涯教育に関する人を希望した。

きめられた日が珍らしく雨だった。1人で全然知らないところへでかけるのは本当に勇気のいるこ

とで途中から引返したくなった。でもあたってくださるの精神でぶつかるとにした。私は大人で、勉強している人に逢っているいろいろ聞いてみたいと思っていたのですが、ここで逢った人はその人たちをめんどろみている事務の人達だった。ここで逢ったその女の人もていねいにわかりやすく話してくれた。本当にみんな親切だナと感謝する。いろいろなパンフレットをもらう。一般成人向の楽しい学習がもられていた。ダンスやテニス、こつとう品、なども入っている。又一人よりも二人になると月謝が安いのである。夫婦して是非と呼びかけている。国全体がかなり力をいれていることも知った。若い人から年よりまで年齢層はかなりの巾があるとの話。大学が1部の人のための狭き門でなく社会と結びついて生きているという感じをうけた。

☆ 校長も生徒

アメリカのホームステイでは11日間全然日本語がわかる人が1人もいないところへ1人ずつくばられその地区の学校へでて日本紹介の授業もした。「私の言おうとしていることがわかるか」と念をおしながら、オハイオ州だったのでオハイオにかけて「おはよう」を教えた。授業を1時間でもやったあとの生徒の顔はその前のうさんくさそうな目は全然ちがひ、次の朝は「オハイオ」と手をふって声をかけてくれた。

心がかよあうってすばらしいと思った。その校長は28才で校長になり、今32才、現在大学で心理学を専攻し、ナイトスクールでは木工のコースをとりすばらしい食卓がしあがったと話していた。何と心豊かなのだろうかとうらやましく思った。

☆ さ い ご に

私のつたない英語で、しかも私の見た外国はほんの一隅にすぎない。そしてその時はただ無中ですごして来たが、今ふりかえってみると、とてもたくさんのことを見たり聞いたりしたと思った。そして自分の記憶のうすれないうちに書いておこうと、思いだすままに自分のメモをみながら記録してみた。

(1978の夏休みに——)